

2021年10月24日（日）／説教者：國分美生

説教：「イエスの女弟子たち」

聖書：マルコによる福音書15：33～41

福音書からは伺い知ることはできませんが、実はイエスの周りにはたくさんの女性の弟子たちがいました。「仕える」とはマルコではイエスの弟子として重要な条件。イエスの十字架の死を見守っていた、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、サロメを、福音書はイエスの「お世話係」ではなく、「イエスに従い、仕え続けてきた人々」(15：14)=弟子、と紹介します。イエスが捕えられた時、男弟子たちはクモの子を散らすように逃げ去りましたが、女弟子たちはイエスが十字架で息を引き取る瞬間を見届けました。

ローマから抑圧されるユダヤ人(男性中心)社会の中で、さらに弱い者として女性は生きていましたが、イエスの言葉と御業に癒され、力づけられた女性達の中でイエスに従う者がたくさん出てきました。父権性社会の中では決して一人前とみなされることのなかった女性達を、イエスは一人の尊厳を持った人間として大切に扱いました。彼女達は本来持っている力を引き出され、新しい価値観の中へと解放されました。だから、イエスと共に生き、イエスに仕え従っていくのが自分の仕事、そう確信できました。傷ついた者が癒され生きていく…それはイエスが宣べ伝えた神の国のイメージ（神と人、人と人の関係が正常になる）へと繋がっていきます。

教会の中で長らくイエスの女弟子達の働きが見えにくくされてきたことは残念です。とりわけマグダラのマリアは、全く歪曲されて語り伝えられ、絵画に描かれてきました。彼女は「不道德な生活に転落した元売春婦で、大いなる罪の女」。そんなふうによりヨーロッパの伝統の中でイメージが作られてきたので、だいたいが肌を露出した妖艶な姿です。聖書の中にあるわずかな情報から男性たちが勝手に作り上げたストーリーが、女性たちを貶めてきました。政治、経済、家事労働…女性に対する差別は過去のものではありません。イエスは女弟子たちが「女性」であったから大切にしたのではなく、その社会の最も不利益を被っている者たちにまなざしを注ぎました。(國分美生)

